

児童の読書力形成に果たす読書日記の役割

— 小学校3年生における読書日記の交流とその分析を中心に —

細 恵 子

(2013年10月3日受理)

Role of Reading Diary that Play to Force the Formation of Reading Children
— The center over to the exchange and analysis of reading diary
in third grade elementary school over —

Keiko Hosoi

Abstract: In Hosoi (2013), summarizes the results of went one year in third grade elementary school teaching of reading diary based think of author to “reading power”, improved “Recording reading life” Omura. By continuing the rubric the teacher according to the individual against reading diary of children, many of the reading ability to think of the author have been formed. At the same time, by or to display or storytelling reading diary for children classes, ties between child through the book has come to be performed. In this paper, focusing on exchanges that each other to read friends reading diary that was redlines so that the comment for class not only to the individual, what reading power under the influence of friends children of third grade elementary school I want to consider whether went wearing.

Key words: reading diary, reading power, interaction

キーワード：読書日記，読書力，交流

1 はじめに

平成20年に公示された小学校学習指導要領解説国語編では、読書を内容に位置づけることとなり、第1学年及び第2学年、第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年ごとに読書に関わる言語活動例が示されている。第3学年及び第4学年の例をとれば、「紹介したい本を取り上げて説明すること。」「必要な情報を得

るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。」等、示されている。

現在筆者が担当している小学校3学年の2社(T社、G社)の国語科教科書では、教材を学習した後、関連する本を読んで好きな場面やおもしろいところなどをカードに書いて紹介する単元や教科書教材に関連する複数の本の紹介が見られる。ところが、読書を取り入れた単元は少なく、身につけたい読書力について具体的なものは示されていない。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：難波博孝（主任指導教員）、山元隆春、朝倉 淳、松本仁志

児童が国語科教科書の短い文章を読解するだけでなく、自分で本を選んで読むことや本のいろいろな読み方を習得することができるようにするためには、「読書力」を明確にし、それに基づいて教師と児童が評価

をしていくことができるようにしなければならないと考える。そして、読書を取り入れた単元が年間を通して少ないことから考えると、多様な読書力形成のためには、日常の読書指導も継続的に行う必要があると考える。

細 (2013) では、増田 (1997) や野口 (2009)、大村 (1984)、足立 (2004)、難波 (2012) の先行研究を参考にして定義した表1の「筆者の考える読書力」に基づき、大村の「読書生活の記録」を改善した「読書日記」(表2)の指導を1年間行った結果(2012年度、筆者のM小学校3年生に対する実践結果)についてまとめ、3人の児童の身についた「読書力」について考察した。

表1：筆者の考える読書力

(1) 読書技術
① 読書の計画を立てる。
② 選書をする。
③ 情報を活用する。
④ 文章を理解し、必要な所を抜き出す。
⑤ 多様な文章を読む。
⑥ 解釈する。
⑦ 自分と関係づける。
⑧ 読み比べる。
⑨ 作品の内容や表現に対する感想をもったり評価したりする。
⑩ 自分の読書を振り返る。
(2) 読書意欲・読書態度
(3) 読書習慣

表2：筆者が考案した読書日記

大村の「読書生活の記録」	大村から取り入れたこと	筆者の変更点
私の読書計画	読みたい本や目標ページ数、冊数を書く。	月ごとではなく、いつでも自由に書く。
読書日記	1日1行でもよい。感想を書いても書かなくてもよい。1冊の本を読んでいる途中でも書ける。	毎日ではなく、2日に1度、自由な量を書く。国語の教科書教材に関連した本や自分で選んだ本の感想の他に、自分の読書生活について書くこともできる。
読書ノート	読み方の例を示す	これまでに学習した読み方を参考にして書く。
私の読書生活の評価	振り返る項目を示す。	メモではなく文章で書く。月末ではなく自由に書く。
私と読書	文章で自己評価をする。	年に2～3回、読書日記を読み直し、自分の伸びや読書に対する思い等を書く。

その読書日記指導においては以下の4つの視点を設定した。

視点1 個に応じた教師の朱書き(児童の身についた読書力を誉めたり助言をしたり、感想を深めたいことについて質問を書いたりすること)

視点2 児童の自己評価(自分の読書生活や読書日記を振り返り、読書日記に自分の問題点や伸びなどについて書くこと)

視点3 教師と児童との音声による対話(休憩時間に本の選び方や読書に対する思い、読書の様子等について対話すること)

視点4 学級に対する教師の取り組み(児童の読書日記を朝の会で学級に読み聞かせたり教室に展示したりすること)

細 (2013) では、視点1や2,3のように教師が児童一人一人に対して直接指導することにより表1の読書力の多くが形成されることが明らかになった。

それとともに視点4の学級に対する教師の取り組みによっても、友だちの読み方や読書日記の書き方を真似る姿や、友だちの読んだ本を読む姿、休憩時間に友だちと一緒に本を読む姿が見られるようになった。

このように、教師による評価や児童自身が行う評価、児童同士の結びつきが行われることにより、児童の読書力は形成されていった。

今後は、視点1と4に改善を加えることで、さらに集団での学び合いができ、多様な読み方が集団に広がるのと同時に、一人一人の児童の読書力の形成が期待できるのではないかと考える。視点1では、個に応じたノートへの朱書きを行ってきたが、本研究では、個の読書日記から学ぶという視点を持ち、学級の児童全体も意識して朱書きを行う。視点4では、友だちの読書日記が形として自分の手元に残り、じっくり読み、学ぶことができるような手立てをとる。

本稿では、児童同士が読書日記を読み合うという交流に焦点を当て、児童が友だちの影響でどのような読書力を身につけていったかを考察したい。

2 読書日記による交流の方法

2013年4月から現在の勤務校(M小学校)3年1組の児童38名に対して読書日記指導を行う。児童は毎日、読書日記と一言日記を交互に書く。

視点1では、定義した読書力に基づき、筆者が一人一人の読書日記に対してできたことやアドバイスを朱書きする。また感想を広げたり深めたりしたい時には

質問も書く。全体で学び合えるものである場合は、個に対してだけでなく、学級に対するコメントになるようにノートに朱書きをする。

視点4の読書日記を友だち同士でじっくりと読み合う手立てとしては、筆者が「読書の広場」を作成する。これは、日頃の児童の読書日記から学級の児童に紹介したいもの（3～6人分）を筆者が選び、筆者が朱書きしたコメントと共に印刷するA4枚1枚の読書通信である。1週間に1～3回、児童に渡すようにする。

「読書の広場」に載せる作品は、学級全体で学び合える内容や表現のものにするが、載る児童が偏らないように配慮する。児童と約束することは、4月から7月までに全員1回は「読書の広場」に載せること、学び合えるものがあれば2回目、3回目で載ることもありうることである。このようにして、意欲をもって読書日記に取り組むことができるようにする。

「読書の広場」は朝の会で配布し、教師が読んだり、一人で読ませたりする。もう一つの読み合う手立てとしては、「読書の広場」には載せていないものでみんな読んでほしいものを教室に展示する。

3 読書日記による交流の実際

6月末までに「読書の広場」を13号出しており、38人中36人の児童の読書日記を載せた。

本節では、「読書の広場」を読み合うという交流を行うことで、「友だちと同じ伝記や人物に関する本を読む意欲をもつこと〈表1の読書力(2)〉や、伝記の人物に共感したり人物に対する感想をもったりすること〈表1の読書力(1)⑥⑨〉ができるようになった児童たち」、「同じ本を読んで感想を交流し、読書技術〈表1の読書力(1)〉を身につけていった児童たち」、「自分(たち)との関連づけ〈表1の読書力(1)⑦〉ができるようになった児童たち」を取り上げる。

では、これら3つの事例のそれぞれにおいて、「読書広場」に載せた児童の読書日記、展示した読書日記を紹介する。〈先生から〉は教師のコメント（朱書きしたこと）である。児童の読書日記の下線部は読書力が表れたところである。〈〉内の読書力の番号は、表1「筆者の考える読書力」の番号である。

(1) 友だちと同じ伝記や人物に関する本を読む意欲をもつこと〈表1の読書力(2)〉や、伝記の人物に共感したり人物に対する感想をもったりすること〈表1の読書力(1)⑥⑨〉ができるようになった児童たち

A児は、読書日記を書き始めた4月初め頃から人物に関する本に興味をもっており、『ナイチンゲール』『野口英世』『ジャンヌダルク』『ガンジー』『アンネ・フランク』の感想を書いていた。そして、4月29日には以下の文章を書いた。筆者は、これをきっかけに他の子どもたちにも伝記に出会わせたいと考え、「読書の広場」3号（4月30日）で紹介した。

題：こどもに伝えたい五十人のお話

ほくは、「こどもに伝えたい五十人のお話」という本がすきです。理由は、ゆうな名人の名前やせいかくを知ることができるからです。たとえば、野口ひでよやエジソン、ガリレオなどのゆうな名人を知る本です。これからもいろいろな本を読んでいきたいと思います。〈先生から〉伝記を読むと、その人のすばらしいところを感じるができますね。

A児の日記からは、内容に対する自分の感想をもつこと〈読書力(1)⑨〉と人物に関する本を読みたいという意欲〈読書力(2)〉が表れていた。

5月9日にはB児が、初めて読んだ伝記のあらすじと感想をノート2ページ以上書いてきた。筆者は感想の書き方の一例として朝の会で紹介し、以下の読書日記を展示した。

題：みんなの伝記「ヘレンケラー」を読んで

(前略)ヘレンさんはだんだん大きくなって食事の時に、手で食べ物をとったり、人の食べ物も手づかみでとったりしたので、サリバン先生はゆるしません。私はその気持ち、分かったと思いました。私は、ヘレンさんのように、できなかったことをいっしょうけんめいやることをこの本から学びました。〈先生から〉伝記からは人の生き方を学ぶことができますね。ほかの人の伝記も読んでみるといいですね。

B児は、人物の気持ちに共感することや自分が人物から学ぶこと〈読書力(1)⑥〉ができていた。5月13日には、『モーツァルト』を選んで読み、感動したところを書いた〈読書力(1)⑨〉。

C児は、A児が読書日記に書いていた題名をきっかけにして『野口英世』を読み、5月13日に次のように書いた。

題：野口ひでよ

ほくはこの本を読んで、野口ひでよがやけどをしていたそうだと思います。〈先生から〉つづきのかんそうを教えてください。

C児は、その後の感想で「野口ひでよはやけどをして、病院もなくてなかせなかったのがざんねんそうでした。」と書いた。C児は、人物の思いを感じ〈読書力(1)⑥〉、その後『コロブス』を選んで読んだ。〈読書力(2)〉。

D児は学校図書館や市立図書館で伝記を借りていた〈読書力(2)〉ので、筆者はこの児童をみんなの前で誉めていた。D児は、A児やB児の読書日記を読んだ後、読書日記の中で伝記が好きだと述べたので、筆者は物語を読むことが多い児童に伝記のよさを知らせたいと考え、「読書の広場」7号(5月15日)で次の読書日記を紹介した。

題：私の好きな本

私の好きな本は、伝記の本です。伝記の本を図書室でも図書館でもよくかかっています。読むうちに(この人はこういうふうにながらばったんだな。)と分かってきます。

その中で一番好きな本は、「すぎはらちうね」です。なぜなら六千人もすくった人だからです。ビザというものをつきつきかいてわたしてあげるといのちがたすかるのです。でも、なぜビザをわたすといのちがたすかるかふしぎです。

もっといろんな伝記の本を読みたいです。いろんな人を見て、感じて、いい発見をしたいです。

〈先生から〉いろいろな人のすばらしいところを感じてください。

D児は、伝記に対する思い〈読書力(2)〉と一番好きな伝記の本とその理由〈読書力(1)⑨〉について書いた。

E児は、D児の読書日記を読んだ日に同じ「杉原千うね」の本を読んだ。筆者は、朝の会で、E児の以下の読書日記を読みながらD児と違う感想をもったことをみんなに紹介し、後でこれを展示した。

題：杉原千うね

千うねが「せんそうもなくなりますか。」と言う文がすきです。理由は、千うねのせんそうをとめたい気持ちがわかる文だからです。千うねのお父さんが千うねを上げます場面もすきです。それははげますことはいいことだからです。

千うねがユダヤ人をたすけるところが心にのこりました。千うねは、人にたのまれたことをする千うねでした。とてもすごいです。

千うねのことがしっかりわかったので144ページまで読みたいです。

〈先生から〉千うねは人を大切にする人ですね。

E児は、好きな文を引用し、人物の気持ちを考えたり〈読書力(1)⑥〉、人物に対する感想を書いたりした〈読書力(1)⑨〉。そして続けて読もうという意欲をもった〈読書力(2)〉。

F児は、A児が読書日記に書いていた『野口英世』を読み、D児の感想と筆者のコメント「すばらしいところを感じてください。」を読んだ日に以下のように書いた。

わたしは「野口英世」の本を読んで、すばらしいなと思ったことがあります。「野口英世」は、小さい時にひどいやけどをしてしまいました。そのため、左手のゆびは内がわにまがってちぢんでのびないようになっていました。それなのに、「野口英世」には医者になりたいというゆめがあったので、たくさん勉強をしました。わたしは、手が不自由なのに勉強をしてすばらしいと思います。
〈先生から〉ゆめがあれば強くなれるのですね。

F児は、人物のすばらしいところについて書いた〈読書力(1)⑨〉。

D児はE児とF児に影響を与えた児童であるが、G児の影響で他の人物の伝記を借りて読むこともでき、自分の読書日記が「読書の広場」7号に載った日に以下の文章を書いた。

題：「ふじこ・F・ふ二お」

この人は、ドラえもんなどを作り出した人です。この本は、Yさんが読んだと言っていました。そうしたら、私はなぜか「へー私もかりようかな。」と思いました。(後略)

〈先生から〉友だちが読んだと聞けば読みたくなりますね。

D児の読書日記には、読む意欲〈読書力(2)〉が表れていた。

H児は、A児が書いていた『エジソン』を読み、D児の読書日記を読んだ日に以下のように書いた。

題：エジソン物語

私は、この本を読んで感動したところがあります。それは、エジソンがみんなのためにつらいけんきゅうをしなくてもっと楽にすごしてもらいたいと強く心に感じたところでした。

私は伝記の本を読んだのははじめてです。それで一番すきなしゅるいの本になりました。これからもいろいろな本を読んでいきたいです。

〈先生から〉ぜひいろいろな人の伝記を読んでみてください。感動することがもっとあると思いますよ。

H児は、人物に対して感動したところを書いた〈読書力(1)⑨〉。この日記には、伝記が好きになったことやいろいろな本を読もうという意欲〈読書力(2)〉が表れていた。

D児は、I児にも影響を与えた。I児は、D児の読書日記を「読書の広場」7号で読んだ日に「Dさんはすごいと思います。なぜなら私のめざしている伝記の本をたくさん読んでいるからです。今度の図書館の時間は伝記を借りたいです。」と書いた。そして、5月19日に以下の文章を書き、次の朝登校したらすぐに筆者に「伝記が好きになった。」と話してくれた。

題：宮沢賢治

私は、Dさんみたいにでんきの本をかりてみました。でんきの本をはじめてかりました。

宮沢さんはとてもえらい人です。さいご、死ぬ時に「国訳の妙法蓮華経」を一千部つくって・・・みなさんにわけてあげてください。」という言葉がとてもかっこいいです。

これからもでんきの本をいっぱい読みたいです。
〈先生から〉友だちが読んでいたしゅるいの本を読むようになりましたね。

I児は、D児の読書の様子から、読みたいという意欲を高めること〈読書力(2)〉や、好きな言葉を引用して、人物に対する感想を書くこと〈読書力(1)④⑨〉ができた。

J児は、D児がG児に紹介されて読んだ本を読み、6月25日に初めて人物に関する本について以下のように書いた。

題：でん記 藤子・F・不二雄

藤子・F・不二雄先生がまんがを書くゆめをもってすごかったです。ゆめをあきらめなければかなうとわかりました。

〈先生から〉これは、前にDさんが読んだ本でしたね。大事なことを感じることができましたね。

J児は文章を書くことが苦手だったが、ここでは、人物に対する自分の思い〈読書力(1)⑨〉と分かったこと〈読書力⑥〉を書いた。

(1)で取り上げた児童の読書日記から、児童の身についた読書力を見ていくと、次のようになる。

- ・A児は、意欲をもって人物に関する本を読むことができ〈読書力(2)〉、友だちが伝記に出会うきっかけを与えてくれた。
- ・「読書の広場」の交流を通して友だちと同じ本や他の人物の本を進んで読むようになった〈読書力(2)〉。
- ・D児は、読んだ伝記の中から好きな本を見つけ、さらに読む意欲を高めた〈読書力(2)〉。
- ・D児の読書日記により、H児やI児は伝記が好きになった〈読書力(2)〉。
- ・D児の読書日記の書き方がきっかけとなり、E児、F児、H児、I児、J児は、人物に対する感想を書くようになった〈読書力(1)⑨〉。
- ・B児とJ児は、人物から学んだことを書くようになった〈読書力(1)⑥〉。
- ・E児とI児は、引用すること〈読書力(1)④〉ができるようになった。

(2) 同じ本を読んで感想を交流し、読書技術〈読書力(1)〉を身につけていった児童たち

「サーカスのライオン」は現在の勤務校で使用している国語教科書とは別の教科書の教材である。これを家庭で全員が読み、読書日記により感想を交流することができるようにした。

まず筆者は、K児とL児の読書日記を「読書の広場」10号(5月21日)で紹介した。この二人のものを取り上げた理由は、感動したところを書いたことは共通しているがK児は人物に、L児は人物関係に着目しているところが異なるからである。

【K児の読書日記と教師のコメント(朱書き)】

この本を読んでかんとどうした場面があります。それは、火の中でライオンが男の子をたすげるところです。理由は、人のために自分のできることをすばやくやっているからです。ライオンを人にたとえるとマザーテレサみたいですね。

ライオンは火の中に入ったからしんでしまいました。つぎの日はサーカスにはライオンはいませんでした。だから、なみだが出ました。こんなライオンはすばらしいなと思いました。

〈先生から〉感動したところとライオンに対する思いを書きましたね。

K児は、場面や人物に対する自分の思い〈読書力(1)⑨〉と自分が読んだ本の中の人物と読み比べたこと〈読書力(1)⑧〉を書いていた。

【L児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

この話はラストシーンがかんどうできでした。ライオンが男の子をたすけたからです。ライオンはいのちがけでたすけました。男の子とゆうじょうでむすばれていたということが分かり、かんどうしました。
〈先生から〉ライオンと男の子がゆうじょうでむすばれていると感じたのですね。

人物関係について書いていた〈読書力（1）⑥〉のはこのL児だけだった。

このK児とL児の読書日記を読み合った後、筆者はみんなにもう少し深く読ませたいと考え、以下の質問を出し、2回目の読書日記を書かせ、展示した（5月27日）。

☆みなさんは、ライオンのじんごのことをどう思いましたか。

☆じんごは、なぜいのちがけで男の子をたすけたのでしょうか。

次に2回目に書いた4人の読書日記を紹介する。これらの児童は、2回目の読み方が広がったり、深まったりした児童である。

【M児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

ほくは、この話を読んで、じんごがいのちがけで男の子をたすける場面に感動しました。男の子は、自分のためにしんでしまったじんごのことを一生わすれないと思います。
〈先生から〉前とはちがうかんそうをもちましたね。

M児は、K児とL児と同様に感動したところを書いた〈読書力（1）⑨〉。また、1回目の感想では、じんごに対する自分の思いを書いたが、2回目には、男の子の立場からも読んでいた〈読書力（1）⑥〉。

次のI児とN児は、前述した筆者の質問に対して進んで考え、1回目よりも感想が深まった児童である。

【I児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

じんごは、心のやさしいライオンです。（中略）
ちゃんと人間の心も読み取っています。
男の子は、じんごのためにチョコレートをもってきてお話をしたので、そのおかえしに男の子の命をすくったんだと思います。
〈先生から〉じんごはなぜ男の子のためにそこまでできたのでしょうか。

I児は、1回目の感想では、じんごをかつこいと感じ、2回目には、じんごの優しさを感じ、男の子のかかわりからじんごの行動の理由を考えた〈読書力（1）⑥〉。

【N児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

私は、「じんごはなぜいのちがけで男の子をたすけたのだろう。」ということについて考えました。
男の子の親切にすぐわれたからライオンのじんごは男の子をすくったのです。男の子は、じんごが元気がなかったからおみまいでチョコレートをあげました。ライオンはチョコレートはすきではないけど、気持ちのやさしい男の子にかんしゃして火の中に入って男の子を助けたんだと思います。
〈先生から〉はじめ元気がなかったじんごは男の子のおかげでどんな気持ちに変わったでしょう。

N児は、1回目の感想で、じんごのことを勇気があると感じ、2回目には、元気のないじんごが男の子のやさしさにふれたことをとらえた〈読書力（1）⑥〉。

L児は1回目の感想と同じように感動したことについて以下のように書いた。

ラストシーンがやっぱりかんどうできです。
ほくは、あのライオン、じんごはゆうかんですべてが本気でやさしいライオンということが分かりました。どこからそう思ったかという、ライオンは男の子のためにおりをぶちこわし、男の子を思ったところ。ふつうだとあんなことはできません。ということは、あの男の子はライオンにとっては命よりも大切なのだと思いました。
〈先生から〉じんごはどうして男の子のことをそんなに大切に思ったのでしょうか。

L児は、1回目に書いたところとは別のところを根拠にしてじんごに対する思いを深め〈読書力（1）⑨〉、じんごの強い思いを読み取った〈読書力（1）⑥〉。

2回目の読書日記では、他の児童も以上の4人の児童のように感想の深まりや広がりが見られたので、最後にもう一度読書日記に書かせることにした。そして、「読書の広場」11号（6月3日）で次の4人の読書日記を紹介した。

O児は、文章を読んで内容を理解することや文章を書くことが苦手であったが、じんごの気持ちを考え、次のように書いた。

サーカスのライオン、じんごは、毎日おなじことをさせられておもしろくないと思います。ぼくがじんごだったらさみしいです。
〈先生から〉物語のはじめごろのじんごは元気がなかったのですね。

O児は3回目の読書日記で初めて、じんごの最初の気持ちを考えた〈読書力(1)⑥〉。

P児は以下の文章を書いた。筆者は、O児の書いたことと関連させてこの文章からみんなにじんごの変容をとらえさせたかった。

じんごは、なぜチョコレートがきらいなのにくげとって食べたんだろう。男の子が毎日来て、お話をしてくれてとてもうれしかったんだと思います。
〈先生から〉さみしかったじんごは、男の子が毎日話をしてくれて気持ちがかわったようですね。

P児は自分が問いを作り、それに対して、男の子との会話によりじんごがうれしい気持ちになったことを読み取った〈読書力(1)⑥〉。

Q児は、以下の文章を書いた。

私は、「サーカスのライオン」を読んで心にのこった場面が2つあります。
一つ目は、男の子が「ぼく、サーカスがすき。おこぼかいためてまた来るんだ。」と言った場面です。男の子に言われたじんごはきつと、「ありがとう。がんばるよ。」と思ったと思います。
二つ目は、男の子のおかげで「ようし、あした、わたしはわかいときのように、火の輪を五つにくぐりぬけてやろう。」と思えた場面です。
〈先生から〉じんごは、男の子にはげまされたのですね。

Q児は始め、多くの児童と同様に、じんごが男の子を助ける場面について書いていたが、3回目の感想では、心に残ったことを二つ選び〈読書力(1)⑨〉、さらにクライマックスの前の場面のじんごの気持ちに変化したところに目を向けるようになった〈読書力(1)⑥〉。

I児は以下のように書いた。

じんごがなぜ男の子のためにそこまでできたかというと、じんごはやさしい子と思っているから、そして、男の子がお母さんに会うのを楽しみにしていたからだと思います。
〈先生から〉じんごは、男の子にお母さんと会わせてあげたかったのですね。

I児は、家族と一緒にいられないじんごが男の子の気持ちを理解し、母親に会わせてやりたいという思いをもったことを読み取った〈読書力(1)⑥〉。

以上の3回の読書日記の交流により、まず一人一人が感想を深めたり広げたりすることができるようになった。また、多様な感想とコメントを読み合うことで、3回目の感想では、人物の気持ちや人物の行動の理由を解釈する児童が増えた。

さらに、その後、友だちの読書日記を読んでそれに対する思いを書く児童(S児とU児、I児)が出てきた。

S児は、「読書の広場」12号(6月13日)でR児の読書日記を読み、自分の考えを書いた。

【R児の読書日記と教師のコメント(朱書き)】

題：ずーっとずつとだいすきだよ

ぼくは、この本を読んで、犬のエルフィーにいつも男の子(ぼく)が「ずーっとずつとだいすきだよ!」ということを毎日言っていたと書かれていたので、一番のたからものなんだな—と思いました。

さい後には、エルフィーがしんでしまって、その時、ある男の子が来て、「子犬を3びきあげよう。」と言いました。そうしたら、ぼくは「いらぬ」とことわりました。それはきつとりゆうがあつたんだと思いました。みなさんもなぜかを考えてみてください。きつとりゆうはたくさんあると思いますよ。

〈先生から〉みんなにも考えてほしいですね。

【S児の読書日記と教師のコメント(朱書き)】

題：読書の広場を読んで(Rさんの問い)

わたしは、読書の広場を読んで、Rさんの問いに答えます。男の子(ぼく)はエルフィーが大大大すきだったし、宝物だったからエルフィーがしんでしまつてもかなしかったんだと思います。それでもらうのだったらエルフィーにた子犬がほしかったから男の子(ぼく)は、「いらぬ」と言つたんだと思います。

〈先生から〉他の犬はエルフィーではないですね。

このように、R児は友だちに理由を問いかけ、S児はそれに対して自分の考えを進んで書いた〈読書力(1)⑥〉。

同じ「読書の広場」12号で紹介されたT児の読書日記を読んで、U児も自分の考えを書いた。

【T児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

題：「スーホの白い馬」を読んで

私は、「スーホの白い馬」を読んでかんだうした場面が二つあります。

一つ目は、白い馬が何本かの矢がささってもひしにスーホのもとに帰ろうとしていたところです。

二つ目は、スーホはとてもうたが上手で、白い馬が「私がかつきを作ってください。」と言ったところです。それだけ相手のことをしりつくして、とてもなかがふかまっていたので、二人とも相手のことが大切だったと思います。

〈先生から〉スーホと白い馬の心のむすびつきについて書いていますね。

【U児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

題：「スーホの白い馬」

矢が何本もささって走ったら死んでしまうのに走ったのはスーホにどうしても会いたかったんだと思います。

〈先生から〉さいごに大好きなスーホに会いたかったのでしょうね。

U児は、毎回短い文章しか書かなかったが、T児が感動したことの一つ目に書いたことの理由を書いた〈読書力(1)⑥〉。

I児は、「読書の広場」13号（6月17日）でV児の読書日記を読み、自分の考えを書いた。

【V児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

私はこの「百万回生きたねこ」の話を読んでかんだうをしました。ずっとしあわせではなかったけど、さいごにはとてもしあわせだったからもう生き返りませんでした。

〈先生から〉このねこにとってしあわせとはどういうことなのでしょう。

【I児の読書日記と教師のコメント（朱書き）】

この本はVさんが読んで本で、私もVさんと意見が同じです。白いねこからはすかれませんでしたが、でもずっとそばにいただけでも二人はふうふになりました。やがて白いねこはしにました。ねこはずっとなっていました。ある時ねこもしにました。ねこは二度と生き返りませんでした。私はこんな小さなことでもしあわせになるんだと思いました。

〈先生から〉ねこは白いねここと出会ってよかったですね。

I児は、V児と同じように、最後にねこが幸せになったことに感動し、小さなことの幸せを感じた〈読書力(1)⑨〉。

「サーカスのライオン」は教師が児童に与えた教材だったが、S児とU児とI児は、進んで友だちの読書日記に対してかかわるようになった。

【(3) 自分(たち)との関連づけ〈読書力(1)⑦〉ができるようになった児童たち】

自分と関連づける読み方について始めに「読書の広場」1号（4月19日）で紹介した読書日記は、以下に示したW児のものである。

題：ファールブルこんちゅうき アリ

「アリのおかあさんがたまごをうんで生まれてから5時間～6時間たつと、えさのもぐらのしがいをひとり食べるようになります。」のところが感動しました。理由は、ひとりやるってことは、人間はかんたんに思うけど、アリは小さい体でえさをすにはこんでおかあさんやおとうさんのおてつだいをするからです。ほくは生まれてから5、6時間たつてもごはんやミルクを食べたりのんびりすることはひとりではできませんでした。だから、感動しました。

〈先生から〉自分とくらべているところがいいですね。本を読むと新しいことを知ることができますね。

W児は、自分の小さい頃と比べ、アリの成長の速さに感動した。

B児は、5月7日に、次のように書いた。筆者は、学級のみんなにこれを読み聞かせ、展示した。

題：ファールブルこんちゅう記

ありは、道やおにわをちょこちょこ歩いて食べ物さがします。見つかると、みんなで力を合わせて「よいこらせ」とひばっていきます。

「みんなで力を合わせて」という文章が3年1組もできると思いました。

〈先生から〉ありも人間もにているのですね。

B児は、アリの行動から自分たちの学級へと目を向けていた。

「読書の広場」10号（5月21日）では、次のX児の読書日記を紹介した。

題：10びきのかえるのなつまつり

わたしは、この本を読んで、10びきのかえるがひしにどじょうじいさんをすくうところが一番心にのこりました。みんなの中で一番役立ったのがかんがえるくんです。かんがえるくんは、たすけようとひしになって、さいごにはみんなでなかよくまつりができました。かんがえるくんは、スケートぐつとおもちゃのパケツでどじょうじいさんと水をいっしょにはこんで、スケートぐ

児童の読書力形成に果たす読書日記の役割
—小学校3年生における読書日記の交流とその分析を中心に—

つでバケツをはこびました。そのとき、とちゅうでヘビにおそわれました。10びきのかえるとどじょうじいさんは、びっくりしました。それでも11びきで力をあわせ、ヘビからにげてすごいなと思いました。

この本で思ったことは、みんなで力を合わせるとなんでもできるということです。3年1組でもきょう力していきたいです。

〈先生から〉一人ではできないこともみんなで力を合わせればできますね。

X児も、登場人物の行動から大事なことを考え、自分たちの学級へと目を向けた。

次は「読書の広場」13号（6月17日）で紹介したY児の読書日記である。

題：ごめんね ともだち

おおかみはきつねに負けてばかりでくやしくなってきたかをしています。しょうじき、3の1もおなじょうたいです。言葉がきついでこの本ににっています。すこしのことですぐにけんかがおこります。

でも、二人はおたがいの気持ちを分かり合ってまたなかよしになりました。

ほくは、この本から学んだことがあります。まず一つ目は、おたがいの気持ちを分かり合うことです。二つ目は、一人ではさびしいことです。

ほくは、友だちがたくさんいます。これからももっと友だちをふやして楽しい毎日にしたいです。

〈先生から〉自分の学級のことを考えながら読みましたね。

Y児は、自分の学級を振り返りながらこれからの自分についても書いた。

次のB児は、「もし・・・だったら」という読み方をした。筆者は、次の読書日記を「読書の広場」11号（6月3日）で紹介した。

題：サーカスのライオン

私は、さい後のページで感動しました。もしも私がおきゃくさんだったらと考えました。「じんごはいないけれど大好きだよ。一生わすれないよ。ありがとう。男の子を助けてくれてかんしゃしています。」と言ってあげたいです。星になったのかもしれない。

〈先生から〉自分がまわりの人たちになったつもりでじんごに対する思いを書くことができましたね。

B児は、作品世界に自分が入りこみ、人物の気持ちを考えた。

Z児は、B児の読書日記を読んだ日に、同じように

「もし・・・だったら」という読み方をした。

題：すきときどききらい

ほくは、この本で2つかなしくなった場面があります。一つ目は、お兄ちゃんがおとうとにいやなことをされると、ほくもかなしくなります。二つ目が、お兄ちゃんにきらわれるおとうとの気持ちです。ほくがもしおとうとだったらちゃんとした気持ちをいいたいです。

〈先生から〉お兄ちゃんがいるから弟の気持ちがよく分かりますね。

Z児も、人物（弟）と同じ立場に立って人物の気持ちを考えた。

H児は、これからの自分について書いていた。筆者は、次の読書日記を「読書の広場」3号（4月30日）で紹介した。

題：おとうふ百ちようあぶらあげ百まい

このお話は、男の子のふりをしたきつねがおねえちゃんのためにおとうふとあぶらあげを毎日とどけておねえちゃんが食べて、元気になるお話です。

すきな文章は、「ほく、大きくなったらおとうふやあぶらあげをつかって、みんなによるこんでもらいたいんだ。」です。なぜなら、おじさんのおとうふとあぶらあげの味がずっと守れるからです。

わたしも、人がよろこぶようなことをしたいです。

〈先生から〉あらすじをわかりやすくまとめて書くことができましたね。自分がこれからしたいことも書くことができましたね。

H児は、好きな文章から自分に目を向け、これから自分もしたいことを考えた。

次のO児の日記は「読書の広場」4号（5月7日）で紹介した。

題：おばあさんのねこになったねこ

おばあさんのねこになったねこは、さいしょはわるいねこでしたが、おばあさんであって、えさをもらったりやさしくしてもらったりしたので、いいねこになりました。ほくは、わるいねこよりやさしいねこが好きです。ほかのねこもおばあさんにひろわれたので、やさしいねこになりました。

人にやさしくするとされた人もやさしくなれることがわかりました。ほくも人にやさしくなりたいです。

〈先生から〉さいしょとさいごをくらべていますね。動物（ねこ）の様子からわかったことと自分のありかたを書いたところがよいですね。

O児も、H児と同様にこれからなりたい自分について

て考えた。

W児は、なりたい自分についてO児と同じ考えをもち、5月7日に以下の文章を書いた。

題：ファーブルこんちゅうき ふんをころがす虫

ぼくは、たまをころがそうとしている時、べつのだまころがしがやってきて「ぼくがてつだってやるよ。」というところが気に入りました。理由は、前「アリ」で書いたように、おかあさんやおとうさんではなくなまをたすけてあげてやさしいからです。

ぼくも、Oくんが書いたようにやさしい人になってなまをたすけたいです。(後略)

〈先生から〉友だちと同じ考えですね。

以上の児童9人は、登場人物の行動と自分(たち)を比べたり重ねたりすることや「自分だったら・・・」と考えること、これからの自分について考えることなどの「自分との関連づけ」ができた。

4 考 察

これまでの筆者の実践では、国語科の「読むこと」の単元において、教科書教材や教師が選んだ本を児童全員で読んできたが、読書日記を読み合うという交流を継続的に行うことで児童は、友だちからいろいろな本を知り、友だちが読んだ同じ本や同じジャンルの本を進んで読むことができるようになった。小学校学習指導要領解説国語編では、伝記は高学年で扱うようになっているが、日常生活では3年生でも友だちの本の選び方や読書日記の内容から刺激を受け、図書館で進んで伝記を借りて読むようになった児童や初めて読んで好きになった児童が多く見られた。つまり、読書日記による交流は、児童に本との出会いを増やし、読書意欲を高め、読書の幅を広げる役割を果たすと考えられる。

これまでの朱書きによる個への読書日記指導においては、読むことや書くことが苦手な児童を伸ばしていくことに限界があった。教師が質問を朱書きしても児童はそれに答えられないままで、個の課題を解決することが難しいということがあった。しかし、教師が学級全体の児童を意識して朱書きをし、それを児童が読み合うことで、児童同士の学び合いの場が増え、人物に対する感想をもつこと〈読書力(1)⑨〉、人物の気持ちや行動の理由などを解釈すること〈読書力(1)⑥〉、自分と関連づけること〈読書力(1)⑦〉ができるようになるという成果が見られた。また、友だちの読み

方から自分の読みを深めたり広げたりする児童も増えた。「読書の広場」を読み合う場は同時に学び合い認め合う場ともなり、読み方が分かり、読書が好きになったと読書日記に書く児童も出てきた。授業中は発言することが苦手な児童や集中することができにくい児童も、全員読書日記には自分の思いを書くことができ、「読書の広場」で友だちに認められることができた。このように、読書日記による交流は、教師対児童の関係で行う指導に比べ、児童同士が友だちの読み方、感想の書き方などを学び、認め合い、一人の読書力のみならず学級全体の児童の読書力を形成する役割を果たすと考えられる。

今後は、同じシリーズや同じテーマ、同じ作者または、様々なジャンルを読む児童の読書日記を取り上げ、児童がさらにいろいろな本に出会い、自分の好きな本を増やしていけるようにしたい。

友だちの影響を受けにくい児童は、長文を読むことに抵抗があったり読み方が分からなかったりすることが多い。今後は、読書日記に表れた読書力を教師が肯定評価するだけでなく、児童も友だちの読書力について肯定的に話し合えるようにし、本の選び方、いろいろな本の読み方、書き方の習得と習熟を図りたい。

【引用参考文献】

- 足立幸子(2004)「読書力評価の国際標準に向けての一考察(2)－アメリカのNAEPを中心に－」『人文科教育研究』第31号
- 大村はま(1984)『大村はま国語教室8 読書生活指導の実践(一)』筑摩書房
- 難波博孝(2012)「児童の読書力の把握」難波博孝他編『読書で豊かな人間性を育む 児童サービス論』学芸図書, pp.37-51
- 野口久美子(2009)「小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析：全国学校図書館研究大会を事例として」『Library and Information Science』No.62, pp.111-143
- 細恵子(2013)「読書力を育成する読書日記指導の実践－小学校3年生の場合－」『国語科教育』第74集, 全国大学国語教育学会
- 増田信一(1997)『読書教育実践史研究』学芸図書
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社, pp.66-67